



ベラルーシで見た 希望と架け橋

国際環境NGO

FoE Japan

深草亜悠美

ベラルーシ視察 2015.4

- チェルノブイリで何が起きたのか？
- 人々はどのように生活しているのか？
- 今も事故の影響はあるのか？
- 子どもたちの健康はどのようにして守られているのか？
- 持続可能な社会に向けて何ができるのか？

→実際に現地を視察

→ドイツやベラルーシの人々と意見交換



- 日本、ドイツ、ベラルーシの3か国
- ドイツ「核の脅威のない世界のための市民団体」が長年ベラルーシの支援・交流。
- 福島事故を契機に3か国交流がはじまる。
- 日本からは福島から3名、FoEから2名参加。

視察内容



- 学生サークル「エコクラブ」と交流
- 日本文化情報センター訪問（辰巳雅子さんと面談）
- ベルラド研究所訪問
- 財団「子ども達に喜びを」訪問。糖尿病支援プロジェクトなどについてヒアリング
- 保養施設「ナデシタ」訪問
- 希望の庭 訪問
- 移住村 スターリーレペル 訪問

ベルラド研究所



移住村 スターリーレベル



希望の庭



イリーナ・ゲルシェヴァヤ

現地の声



リュドミラさん

- 小児糖尿病の子ども達の支援

- チェルノブイリの日付ぐらいしか知らない。

- 親が子どもに知らせたく無い。

- アレクシエービッチを読み聞かせ

現地の声



バブーシュカ
(おばあちゃん)

- 事故当時30代～
- ミンスクに移住
- 故郷の事は忘れられない
- 年金生活。何種類も薬を飲んでいる。

現地の声



ソフィアさんとレナさん

- 医大に通っている。クラスの大半が大きな甲状腺を持つ。
- 事故の影響を心配している。
- 沢山の人がデモをしたら社会かわるかもしれないけど、それはなさそう。

ベラルーシの市民社会

- 政府からの情報は限られている。事故は収束したと言われている。一方で**甲状腺がんを含む様々な病気の増加**が報告されている。
- チェルノブイリの話は怖い、思い出したくないという人もいる。
- 言論の自由が限られている。市民活動に対する弾圧もある。
- 政治的困難の中、**子どもたちを守って来た市民社会**の存在
- チェルノブイリ法の存在。守られるべき権利・提供されるべき支援が最低限存在する。



八島千尋 作